

本日はご来場いただきありがとうございます。

また、オンライン配信をご覧の皆様、お忙しい中私たちの演奏をお聴き頂きありがとうございます。

ヴァイオリン、クラリネット、ピアノのための楽曲というと、クラシックが相当好きな方でないとピンとこないかと思います。

各楽器を趣味でやっている人でも「この編成でアンサンブルをしてみたいけど、そもそも曲はあるのかしら？」と思うくらい、実はヴァイオリン、クラリネット、ピアノで編成されている楽曲はまだまだ世に知られておりません。

しかし、この小さなオーケストラのような編成は隠れた名曲がたくさんあります。弦楽器、管楽器、鍵盤楽器、それぞれの魅力を存分に発揮することで様々な音色や表現が生まれると思っています。

今回のリサイタルでは、知られざる作曲家の作品はじめ、有名なバーンスタインの名曲をたった3人で表現をする意欲的なプログラムをご用意しました。

私たち Trio Horamiro(トリオ・ホレミーロ)は都立芸術高校の選抜演奏会に出演するために結成致しました。ヴァイオリン堀内からの「珍しい編成のアンサンブルがあるんだけど、一緒にやらない？」という声かけで生まれ、今年で結成15年目を迎えました。

その当時は、まさかこんなに長く3人でアンサンブルを続けているとは思っておりませんでした。しかし高校生だった私たちはあっという間に大学生、そして社会人になり、いつの間にかママになっていたり、はたまたオーケストラのコンミスになっていたり、それぞれの人生を歩みつつ、3人で出来る音楽表現を追求して参りました。

今回はコロナ明け初のリサイタルで、久しぶりに3人で演奏できることを私たちもとても楽しみにしております。

会場の皆様、またオンライン配信をご覧の皆様と、素敵な音楽の時間を共有できることがとても幸せです。

最後に、今回のリサイタル開催のためにご尽力くださった山下様はじめ、SMSの皆様、そして、会場にお越しになれない方へ最高の音をお届けするためにご尽力いただく圓谷様に感謝を申し上げます。

長くなりましたが、皆様に最後までお楽しみいただけるプログラムになっているかと思いますので、どうぞ肩の力を抜いてリラックスしてお楽しみください。

Trio Horamiro

ヴァイオリン、クラリネット、ピアノのためのセレナーデ

W.E.バウスネルン (1866～1931)

恐らく、コアなクラシックファンでもなかなか知っている人は少ないドイツ人作曲家、バウスネルン。それもそのはず、彼は生前成功に恵まれず、一度も作品が出版されていないのである。出版するほど作曲していなかったのか？というと、そんなこともない。バウスネルンは交響曲、声楽曲、器楽曲、そして室内楽曲など、作品のジャンルは多岐にわたるのだ。

今回演奏するヴァイオリン、クラリネット、ピアノのためのセレナーデもバウスネルンの死後、孫で作曲家のディートリヒを始めとした研究者によって評価され始めた曲である。

穏やかに始まる第1楽章は各楽器が美しく掛け合い、このリサイタルの幕開けを優雅に飾ってくれる。第2楽章はうって変わって流れるようなメロディーが曲を盛り上げていく。第3楽章はヴァイオリンとピアノの美しい二重奏から始まる。まるで子守歌のような優しく、愛に満ちたメロディーが特徴的。第4楽章は跳ねるようなメロディーの掛け合いや、途中に現れる壮大なメロディーとの対比が面白い。最後はまるで絵本の最後に「おしまい」と優しく声をかけるように静かに曲が終わっていく。

ヴァイオリン・クラリネット・ピアノのための三重奏曲

G.C.メノッティ (1911～2007)

ジャン・カルロ・メノッティは、イタリアで生まれアメリカで活躍した作曲家である。オペラ作曲家として有名なメノッティだが、この曲は彼が作曲した数少ない室内楽曲の一つである。

第一楽章はクラリネットがテーマとなるメロディーを面白おかしく吹き始め、時には鬱々と、時にはあっけらかんとした様々な表情をみせる。第二楽章は哀愁を運びながらもロマンチックな雰囲気が進んでいく。三つの楽器が絡み合い、切なさの中に光を見出していくような美しさを奏でる。第三楽章はヴァイオリンから始まる、駆け抜けるようなメロディーがクラリネット、ピアノへと受け継がれ、その断片が曲のあらゆる場面で現れる。3つの楽器の掛け合いでとても疾走感のある曲だが、最後は突然幕が下ろされるように終わりを迎える。

「ウエスト・サイド・ストーリー組曲」より

～プロローグ・トゥナイト・マンボ～

R.バーンスタイン(1918～1990) Arr.石川潤(1991～)

レナード・バーンスタインの作曲したウエスト・サイド・ストーリーは1957年に初演、1961年には映画化もされ現代ではミュージカルナンバーの古典として親しまれている。シェイクスピアの戯曲「ロミオとジュリエット」をもとに、当時のニューヨークの社会的背景を踏まえて不良グループの抗争の犠牲となる男女の悲劇が描かれている。

ミュージカルとしてポップで明快なリズムをもつこの音楽は、その楽譜を見ればストラヴィンスキーを思い浮かべるような複雑で洗練された近代クラシックの書法がふんだんに用いられている事がわかる。今回の編曲はそのオーケストレーションを最大限尊重しつつ各楽器の持ち味を活かす事を目指した。

【プロローグ】クラリネットより現れるジェット団のモチーフと、不気味な4度音程で呼びかけられる不和のモチーフを中心に、不穏な空気が暗示される序曲。

【トゥナイト】本作のロミオとジュリエットにあたるトニーとマリアのバルコニーの逢引のデュエット。トニーがクラリネット、マリアがヴァイオリンを担っている。

【マンボ】プロムナードから始まりホイッスルで中断されマンボが始まる。熱狂は曲が終わるまで留まる所を知らず展開する。(石川)

ウエスト・サイド・ストーリーは著作権元からの条件が非常に厳しく、今回演奏する編曲版が出来上がるまで様々な苦難がありました。(本当に想像以上に大変でした…金銭面、メールの返信遅すぎ問題等…苦笑)

ですが、そんな苦難があった分、とても素敵な楽譜を石川君に書いていただけたと思っています。この楽譜の初演はコロナ前の2019年でしたが、コロナ禍になってしまったので、その一回きり。

せっかく素晴らしい編曲をしてもらったのに、それきりになってしまうのは勿体ない！ということで今回のリサイタルのトリとして選びました。

もともとはオーケストラの曲を私たちがどのように表現していくのか、ぜひお楽しみください。